

1505 年アルドゥス刊行イソップ集における
ラテン語翻訳について
— *quae ante tralata habebantur, infida admodum erant* —

吉川 齊

1. はじめに

Vita, & Fabellæ Aesopi cum interpretatione latina, ita tamen ut separari a græco possit pro uniuscuiusque arbitrio. quibus traducendis multum certe elaborauimus. nam quæ ante tralata habebantur, infida admodum erant, quod facillimum erit conferenti cognoscere. ...

イソップの生涯と小話集、ラテン語翻訳付き、ただし各人の判断に応じてギリシア語部分から分離可能。そのラテン語翻訳に関して我々は大変心を砕いた。というも、以前に翻訳されたものが、かなり信用ならないものであったため、比較すれば、このことについて難なく認めることができよう。・・・

これは、1505 年にアルドゥス・マヌティウス *Aldus Manutius* が刊行したイソップ集の扉ページに記載された内容説明の冒頭部分である*¹。

*¹ 1505 年ヴェネツィアにて刊行。試みに WorldCat (<https://www.worldcat.org/>) で調べると、紙媒体で欧米のおよそ 40 機関が所蔵する。この結果にはイタリアの機関が含まれないが、イタリアでは 20 以上の機関が所蔵しており (EDIT16: Censimento nazionale delle edizioni italiane del XVI secolo 参照。 http://edit16.iccu.sbn.it/scripts/iccu_ext2.dll?fn=

ここで述べられているとおり、アルドゥス版イソップ集は、ギリシア語イソップ集にラテン語訳が附されたものであった。この構造について、アルドゥスは、巻末掲載の読者向けの挨拶 (Ald. Lectori. S.) においても「あなた (読者) は適宜その判断でラテン語部分をギリシア語部分から分離可能 (posse te latinum a græco commodissime separare pro arbitrio tuo)」と述べている。また、「我々は、それら (ラテン語翻訳) を、ギリシア語に熟達していない者たちのために含めた (nos eas inseruimus propter literarum græcarum rudes)」とも記しており、多分に教育的意図を持ったものであったと推察される*2。他方、本書には「イソップ」以外の題材も複数含まれるが、イソップ関係の題材にのみラテン語訳が附され、対象としての区別が見られる*3。

アルドゥス本は、大きく二つのギリシア語イソップ集を含む。扉ページの説明では、ひとつは上記「Fabellæ Aesopi」、もうひとつは「ガブリアスの小話集 43 話、短長六歩格、最後のみ跛行短長格、ラテン語翻訳付き (Gabriæ fabellæ tres & quadraginta ex trimetris iambris, præter ultimam ex Scazonte, cum latina interpretatione)」と紹介される。

「Fabellæ Aesopi」は、ギリシア語散文イソップ集である。最初の印刷本は、1480 年頃にボヌス・アックルシウス Bonus Accursius によって刊

10&i=334)、したがって、現在各地の少なくとも 60 機関が 1505 年刊行本を所蔵していることが分かる。また、本書は 1505 年以降にも幾度も各地で印刷されており、当時広く普及した本の一冊であったと考えられる。なお、本書はすでに電子画像版が複数公開されており、本論ではそれらを参照している (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k721125> など)。また、アルドゥス本の扉ページおよび読者向けの挨拶については、Wilson(2016), pp. 192-193, 298-299 も参照。

*2 1505 年以前の刊行本でも、アルドゥスはラテン語翻訳が学習者向けである旨をししば記している。Wilson(2016), pp. 82-89, 96-97, 130-133, 158-161 など。

*3 大英図書館のカタログでは、“Only Æsop and Babrius (Gabrias) are furnished with a Latin translation by the editor; the other works are in Greek” との表記がある (<http://explore.bl.uk/BLVU1:LSCOP-ALL:BLL01000023630>)。実際には、『イソップの生涯』およびアプトニオスやフィロストラトスによる μῦθος に関する説明箇所 (ギリシア語) にもラテン語翻訳が附されているため、「イソップ関係」という方が適切であろう。

行された*4。20世紀初頭にイソップ集のギリシア語写本の系統を整理したシャンブリー Chambry, É. はそれらを Class III に位置づけ*5、最初の印刷本にちなんで *Accursiana* と呼ばれる*6。主に 14～16 世紀の一群の写本に残り、ギリシア語散文イソップ集としては新しい部類のものである。アルドゥス本は 149 話を含む*7。なお、写本では、13 世紀末頃に活躍したマクシムス・プラスデス Maximus Planudes がまとめたときされる『イソップの生涯』*Vita Aesopi* が附されることが多く、アルドゥス本もその例にもれない。

「*Gabriæ fabellæ*」は、43 話を含むギリシア語韻文イソップ集である。ギリシア語では「Γαβρίου ἑλληνοῦ τετράστιχα」と表記されており、Gabrias あるいは Gabrios が主格形と想定される（本論では「ガブリアス」と表記した）*8。これはバブリオスの名が変化したものと考えられるが、実態はバブリオス集というわけではなく、9 世紀のビザンツの司祭イグナティウス Ignatius Diaconus による「*Tetrasticha iambica*（短長格四行詩集）」（と類似作品）がその名で伝わったものである*9。アルドゥ

*4 以下、15 世紀の印刷揺籃期本に関しては、おもに大英図書館編纂の 15 世紀揺籃期本カタログ *Incunabula Short Title Catalogue* (ISTC, <http://data.cerl.org/istc/>) を参照。アックルシウス本は ISTC: ia00098000 として所載。ミラノ刊行。刊行年については、1478 年頃あるいは 1480 年頃。現在 45 機関が所蔵する。ISTC では書名 “*Vita et Fabulae* [Greek]. *Vita et Fabulae* [Latin] Tr: Rinucius. *Fabulae selectae* [Greek and Latin]. Ed: Bonus Accursius” と記載されるが、本書は a) *Vita et Fabulae* [Greek] b) *Vita et Fabulae* [Latin] c) *Fabulae selectae* [Greek and Latin] の 3 部に分かれ、現存するものでは一部を欠くものもある。現在は 3 部とも電子画像版が公開されている。

*5 Chambry(1925), p. 12. なお、1925～26 年刊行のシャンブリーの 2 巻本は、各話の異読版を省いて 2 巻を 1 巻にまとめた簡易版が 1927 年に再刊されており、これが現行のテキストとなっている。本論では 1927 年版は利用しない。

*6 Hausrath(1957), p. XVI. なお、祖本は 8～9 世紀に遡ると想定される (ibid., p. VI)。

*7 アックルシウス集は散文 144 話と韻文 3 話（イグナティウス版）を含み、散文部分については、アルドゥス集と話の順序も一致する。アルドゥス集の方が 5 話多いが、それらは 145～149 話目に配置される。

*8 Wilson(2016), p. 353 n. 373.

*9 Adrados(2000), pp. 493-515; Dijk(1996). Wilson(2016) はこの点に触れていない。

ス本において初めて印刷された*10。

ところで、とくに前者の「Fabellæ Aesopi」に類する散文イソップ集で、ギリシア語からラテン語に訳されたと目される翻訳本は、アルドゥス本刊行時点ですでに複数登場していた。本論では、それらから3種の印刷本を取り上げて、アルドゥスに「infida admodum erant」と評されるようなアルドゥス以前のラテン語翻訳、そしてアルドゥス自身の翻訳を比較検討し、アルドゥスの述べる「信頼性」の問題を手掛かりに、近世におけるイソップ集のラテン語翻訳の在り方について考察する。

アルドゥスによるイソップ集は、初期に印刷されたギリシア語イソップ集として、とくに散文ギリシア語部分が注目されることは多いものの、そのラテン語翻訳についてはこれまで扱われていない。本論は網羅的検討を企図したものではないが、近世以降のイソップ集の展開を考える上での、ひとつの視点を提供できればと期する次第である。

2. 15世紀のラテン語翻訳イソップ集

さて、アルドゥス以前の15世紀前半から、ギリシア語散文イソップ集をラテン語に翻訳する試みは行われていた。たとえば、15世紀のラテン語翻訳イソップ集を研究したガッリ Galli, R. は、以下の3名の翻訳を扱っている*11。

- グアリスス・ウエロネンシス Guarinus Veronensis (1422年以前、全28話)
- エルモラウス・バルバルス Hermolaus Barbarus (1422年、全33話)

*10 Crusius(1897), pp. 257-8.

*11 Galli(1978). 本論では、近世の人物名はおもにラテン語名を用いる。なお、本論の翻訳比較の着想は、このガッリの論文がきっかけである。入手の難しい本論文のコピーを快くお貸しくださった専修大学の伊藤博明教授に、この場を借りて感謝申し上げます。

- ラウレンティウス・ウァツラ Laurentius Valla (1438 年、全 33 話)

三者とも修辞学教師としても活動した人文主義者であるが、ガッリによると、グアリヌスとバルバルスの翻訳はそれぞれ写本が一つずつ残るのみであり、ガッリ以前に校訂・印刷の実績はない*12。グアリヌスとバルバルスは師弟関係にあり、写本の奥付表記に従えば、バルバルスの翻訳は、彼がグアリヌスのもとで学んでいる時期に行われたものであった*13。他方、ウァツラの翻訳は複数の写本が残り、1470 年代以降には各地で幾度も印刷刊行されていた。そのため、ウァツラの翻訳は、前二者と異なり広く世に知られていたと考えられる。三者ほぼ共通の構成のイソップ集であるが、ガッリは、三者の翻訳に相互の直接の参照関係はなく、それぞれが独自に翻訳を行ったものと推察している*14。

これら三者が参照したと思しきギリシア語イソップ集に関連して、ガッリはアンブロジアーナ図書館所蔵の 15 世紀の写本 (Ambros. B 47 sup.) を挙げる*15。この写本には 33 話含まれており、三者の翻訳と含まれる話や順序が概ね合致する。この写本そのものが三者の直接の参照元であったかどうか定かではないが*16、当時同種のイソップ集が(あるいは複数)存在し、それをもとに三者のラテン語版が構成された可能性もあろう。また、この Ambrosianus 写本は、Class III (*Accursiana*) に含まれる話を主体としつつ、別系統 (Class II, IV) の数話を含む。その点をふまえて、シャンブリーは CODICES MIXTI に位置付ける一方*17、ハウスラート Hausrath, A. は Class III 形成期の系統 (IIIγ.Φ) と見做し

*12 *ibid.*, p. 14.

*13 *ibid.*, p. 71.

*14 *ibid.*, p. 189.

*15 *ibid.*, p. 190. ウァツラの参照元を検討した Finch(1960) は、関連する写本として 32 話を含む Vat. Pal.Gr.122 (シャンブリーは Ld と表記) も挙げている。ただし、これは 16 世紀の写本と推定されるため、ウァツラの直接の参照元とは考えられない。

*16 Galli(1978), p. 193. ガッリは当該写本が三者の直接の参照元ではないと推測する。

*17 Chambry(1925), p. 23. シャンブリーは当該写本を Mn と表記。

ている*18。

これら三者以外にも 15 世紀のラテン語翻訳イソップ集は複数存在し、なかでもイタリアの人文主義者リヌッキウス・アレティヌス *Rinuccius Aretinus* による、1440 年代後半のラテン語翻訳イソップ集は著名である*19。リヌッキウスの翻訳は 100 話を含み、ウァツラの翻訳同様に 1470 年代から各地で幾度も印刷刊行される*20。一方、ウァツラ版と異なる特徴として、リヌッキウス版をアックルシウス本の対訳に用いたとされる例が見受けられる。また、リヌッキウスの翻訳は、1480 年代以降普及したシュタインヘーヴェル版イソップ集にも一部が採録されており、15 世紀末にも広く知られる状況にあった*21。なお、リヌッキウスが参照したギリシア語イソップ集も明確ではないものの、ペリー *Berry, B.E.* はヴァチカン図書館所蔵の 14~15 世紀頃の写本 (*Vat. Pal.gr.269*) に近いものではないかと推測している*22。108 話を含むこの写本は、シャンブリーが *Class II* と分類し、主要写本をもとに *Vindobonensis* とも呼ばれる系統に位置付けられるものである*23。

*18 *Hausrath(1957)*, p. XII.

*19 リヌッキウスのギリシア語-ラテン語翻訳の全体像については *Lockwood(1913)* に詳しい。イソップ集については、*Lockwood(1913)*, pp. 61-72。邦語では小堀 (2001) など (ただし再検討が必要と思しき部分もみられる)。なお、リヌッキウスはラテン語名で *Rinucius* (リヌキウス) などとも表記されるが、本論ではリヌッキウスに統一している。

*20 最初の印刷本は 1474 年にミラノで刊行 (ISTC: ia00099000)。本書もまた、電子画像版を複数閲覧可能である (1474 年版は <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k701073>)。

*21 シュタインヘーヴェル集は、1476 ないし 1477 年頃にウルムで刊行されたラテン語-ドイツ語翻訳イソップ集である (ISTC: ia00116000)。種々のラテン語イソップ集およびイソップ以外の小話集を元に編纂された集成であり、『イソップの生涯』(リヌッキウス翻訳) と 164 話を含む。リヌッキウス集から 17 話が採録されている。ただしリヌッキウスの表記は *Remicius* (レミキウス) や *Rimicius* (リミキウス) とされる。シュタインヘーヴェル集やその影響については、*Österley(1873)*; *Carnes(1986)*; 小堀 (2001); 伊藤 (2009) など。

*22 *Perry(1934)*。シャンブリーは当該写本を *Cb* と表記。

*23 *Hausrath(1957)*, pp. IX-XI。祖本は 6~7 世紀に遡ると想定される (*ibid.* p. IX)。主要写本は 14 世紀の *Vindob.Hist.gr.130* (シャンブリーは *Ch* と表記)。オーストリア国立図書館所蔵。

ちなみに、前段アックルシウスとリヌッキウスの対訳版は、アックルシウス編集の、一頁左右二段組のギリシア語・ラテン語対訳本であり、61 話を含む。現在の書誌情報に従うと、アックルシウス集の抜粋にリヌッキウスのラテン語翻訳を（アックルシウスが手を加えて）逐語的に並置したものである（ただし、後の検討でも明らかになるように、この情報は誤りと考えられる）^{*24}。この対訳本について興味深いのは、巻末に「(アックルシウスは、) 学識ある者たちではなく、習熟していない者たちや子供たちのためにこの作業を引き受けた (qui non doctorum hominum sed rudium ac puerorum gratia hunc laborem suscepit)」と記されていることである。「およそ語が語に対応するだろう (uerbum quasi uerbo respondebit)」と序文で記されるとおり、組版上もギリシア語とラテン語が概ね逐語的に対応するように配置されており、非常に分かり易い。ラテン語対訳の意図に学習用途を含む点は、アルドゥスとも共通するよう見える。

15 世紀末までの普及具合を鑑みると、アルドゥスが目にし、また当時のアルドゥスの読者が目にし易かったラテン語翻訳イソップ集には、ウァッラ版とリヌッキウス版が含まれると考えてよいだろう。一方、ここでひとつの問題は、両者が翻訳時に参照したであろうギリシア語イソップ集と、アルドゥス本におけるギリシア語イソップ集が必ずしも一致しないということである。とりわけリヌッキウスに関しては、推測さ

^{*24} ISTC: ia00098000 (本論註 4 参照)。ボドリアン図書館所蔵の 15 世紀播籃期本カタログ *Bodleian Incunable Catalogue* (Bod-Inc) では、“Translated by Rinucius Aretinus. Edited by Bonus Accursius. ... The Latin version is based on Rinucius’s, but, as stated in Accursius’s dedicatory letter, it is a more literal translation.”と説明される (Bod-Inc: A-043, <http://incunables.bodleian.ox.ac.uk/record/A-043>)。Lockwood(1913, p. 66 n. 2) は、“Hae fabulae non modo a Rinucii translatione prorsus differunt, sed earum xxi inter Rinucii fabulas non reperiuntur. Perperam igitur apud Hain Reichling Pellechet inscribuntur “Fab. selectae gr. et lat. ex interpretatione Rinucii thetali.””と述べる。ここで Hain Reichling Pellechet は、ロックウッドが参照した当時の書誌カタログ類を指すが、ロックウッドの指摘通りであれば、すでにその時期から情報に誤りが含まれていたことになる。なお、ロックウッドは誤りを指摘するのみで、それ以上にはラテン語対訳部分に関する具体的な記述はない。

れる参照元が Class II (*Vindobonensis*) に属するものであり、アルドゥス本の Class III (*Accursiana*) とはそもそも系統が異なる。それぞれが固有に含む話もあれば、共通と思しき話においても、細部の描写に相違が存在するものもある。

後者の例として、ギリシア語イソップ集のほぼすべての系統で共通して含まれる「狐とライオン」(Fab. 10 Hausrath) を見ておこう。(同系統内においても写本によって差異はあるが、ここではハウスラートのテキストに従う。下線部分は、表記に相違のある箇所である。)

Class II: ἀλώπηξ μηδέποτε θεασαμένη λέοντα ἐπειδὴ κατὰ τινὰ τύχην ὑπήντησεν αὐτῷ, τὸ μὲν πρῶτον ἰδοῦσα αὐτὸν οὕτως ἐφοβήθη ὡς μικροῦ καὶ ἀποθανεῖν. ἐκ δευτέρου δὲ αὐτῷ περιτυχοῦσα ἐφοβήθη μὲν, ἀλλ' οὐχ ὡς τὸ πρότερον. ἐκ τρίτου δὲ θεασαμένη αὐτὸν οὕτως κατεθάρσησεν ὡς προσελθοῦσα αὐτῷ διαλεχθῆναι.

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι καὶ τὰ φοβερὰ τῶν πραγμάτων ἢ συνήθεια καταπραῦνει.

Class III: ἀλώπηξ μήπω θεασαμένη λέοντα ἐπειδὴ κατὰ τινὰ τύχην αὐτῷ συνήντησε, τὸ μὲν πρῶτον οὕτως ἐφοβήθη ὡς μικροῦ καὶ ἀποθανεῖν. ἔπειτα τὸ δεύτερον θεασαμένη ἐφοβήθη μὲν, οὐ μὴν ὡς τὸ πρότερον. ἐκ τρίτου δὲ τοῦτον θεασαμένη οὕτως αὐτοῦ κατεθάρσησεν ὡς καὶ προσελθοῦσα διαλεχθῆναι.

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι ἢ συνήθεια καὶ τὰ φοβερὰ τῶν πραγμάτων καταπραῦνει.

両者とも、それまで目にしたことのないライオンに初めて出会った狐が、最初は死にそうなほど怯えるものの、2度目にはある程度慣れ、3度目には話しかけるほどになる、という大筋の流れは共通する。と

はいえ、この短い話のなかでも、たとえば最初の機会で、Class II では *ιδούσα αὐτὸν* 「ライオンを見たときに」の文言が含まれるが、Class III では存在しない。また、2 度目の機会に、Class II では *περιτυχοῦσα* 「行き合った」のに対し、Class III では *θεασαμένη* 「目にした」のであり、状況の描写に相違が生じている。

短い話であるが、それぞれを原語に即して翻訳した場合、ラテン語に限らずとも、描写の相違が訳文の相違に結びつくことは容易に想像できる。アルドゥスはそれまでの翻訳が信用ならないものとし、過去の翻訳者を批判している（あるいは自身の能力ないし翻訳の努力を自負している）ようにも見えるが、そもそも彼は「信用できる翻訳」としてどのようなものを想定していたのか。あるいは、原典の系統の相違まで考慮に入れた場合、翻訳の信用ならなさは、それぞれの翻訳者が参照した原典の相違に由来するものであった可能性も考える必要があるように思われる。

以上の点をふまえて、原典の系統の相違に注意しながら、次節では具体的に当時のラテン語翻訳の在り方を比較検討する。比較する主な対象は、ワッツラ、リヌッキウス、アルドゥスのラテン語翻訳、および、アックルシウスの対訳版である。アックルシウスの対訳は、アルドゥス以前の意識的な対訳版であると同時に、その翻訳に関係が指摘される（あるいは否定される）リヌッキウスとアックルシウスについて実態を確認する意味でも興味深い対象だからである^{*25}。

^{*25} 15 世紀にギリシア語から翻訳されたラテン語散文イソップ集としては、以上で触れたもののほか、Gregorius Corriarius (1430 年頃、60 話?) や Omnibonus Leonicensus (1430 年頃、全 124 話) のものが挙げられるだろう。ただし、前者は 15 世紀末までに印刷刊行された実績はなく、数種の写本が残るのみ、さらに大半はギリシア語に沿った翻訳でもないようである (Finch(1972); Berrigan(1975) 参照)。後者は 1470 年頃 (ISTC: ia00108500) と 1492 年 (ISTC: ia00108600) に印刷刊行されている (現在 7 機関が所蔵する)。こうした状況からみて、両者のイソップ集が当時どの程度読まれえたか不明である。15 世紀のラテン語翻訳イソップ集とその周辺については、Berrigan(1975); Berrigan(1980); Berrigan(1982); Carnes(1986); Finch(1972); Marsh(2003); 伊藤 (2010) など。邦語では小堀 (2001) がいち

3. 各種ラテン語版の比較検討

比較検討を行うにあたり、すべての話を扱うことは困難であるため、本論では、ハウスラート版に附された一覧を参考にして^{*26}、ギリシア語の全ての系統に含まれ、かつ対象とするラテン語翻訳版全てに含まれる話から、3つの話を採り上げる。また、各ラテン語翻訳に関しては、当時の印刷本を参照する。ウァッラとリヌッキウスに関しては、2、30年の間に幾度も印刷刊行された。本論では主に、筆者が参照できたできるだけ古い印刷版に拠る^{*27}。

さて、筆者が数えた限りでは、検討の対象となりうる話は9つある。ハウスラート版に基づいてタイトルを挙げておく (Fab. はハウスラート版番号、Perry は *Aesopica* 番号^{*28})。

早く15世紀のイソップ集を扱っているが(2001年の講談社学術文庫版は1978年の中公新書版を原本とする)、ラテン語ではリヌッキウス集とシュタインヘーヴェル集を扱うのみである。

^{*26} Hausrath(1957), pp. XXX-XXXV; Hausrath(1959), pp. VII-X. ハウスラートのリストではアックルシウス集およびアルドゥス集は IIIa に該当する。筆者がリストと各話の対応を再確認したところ、ハウスラートのリストには幾つか明らかな誤りが見られた。アルドゥス集に含まれる散文の話に1から149まで番号を付けたとして (Ald. 1~Ald. 149と表記)、正しくは Ald. 58 = Fab. 272 (リストでは Fab. 286)、Ald. 123 = Fab. 224 (リストでは Fab. 226)、Ald. 125 = Fab. 286 (リストでは Fab. 272) である。Ald. 58 と Ald. 125 の対応が逆になっているが、これは話のタイトルが Ald. 58 「ὄνος, καὶ ἵππος.」、Ald. 125 「ἵππος, καὶ ὄνος.」であることが要因かもしれない。その点では、Ald. 123 「Ποιμήν.」もタイトルの混同が誤りの原因である可能性も考えられる。

^{*27} 以下の印刷版を参照。ウァッラは1473-4年頃刊行版 (ISTC: ia00104500)。リヌッキウスは1474年刊行版 (ISTC: ia00099000) および1480年頃のアックルシウス刊行版 (ISTC: ia00098000、本論註4参照)。また、対訳版およびアックルシウスのギリシア語版も同アックルシウス刊行版。いずれも電子画像版が公開されている。なお、アルドゥス版含め、テキストは印刷版から誤りと思しきものも含めて転写している。

^{*28} Perry(1952)。現在はイソップ関係のギリシア語テキストとして *Aesopica* が参照されることも多いが、本論では各系統およびそれらの異読版について、種々の写本の異読情報を細かく残す Hausrath(1957-9) および Chambry(1925-6) のテキストを参照する。

Fab.	Perry	タイトル
10	10	άλώπηξ καὶ λέων (狐とライオン)
23	23	ἀλεκτρυόνες καὶ πέρδιξ (雄鶏とヤマウズラ)
27	27	άλώπηξ πρὸς μορμολύκειον (狐がお面にむかって)
67	66	νεανίσκοι καὶ μάγειρος (少年たちと肉屋)
117	115	ἰξευτῆς καὶ ἀσπίς (鳥狩人とコブラ)
120	118	κάστωρ (ビーバー)
170	161	μάντις (占い師)
216	200	παῖς κλέπτῃς καὶ μήτηρ (盗人とその母)
223	207	ποιμὴν καὶ θάλασσα (牧人と海)

想定されるギリシア語原典の系統は、Class II および Class III の 2 種である。これらの話は、Class II と Class III のギリシア語原文の分量を基準にすると、両者がほぼ同じ (Fab. 10, 27, 67)、Class II の方が多い (Fab. 23, 117, 120, 170, 216)、Class III の方が多い (Fab. 223)、という 3 つに分類できる。全体的な傾向としては、Class III の方が、本文が簡略化されているといえる。ここでは、それぞれの区分から 1 つずつ、計 3 話 (Fab. 10, 170, 223) について比較検討する。

3.1 ἀλώπηξ καὶ λέων [Fab. 10; Ald. 5; Valla 2; Rin. 4; Acc. 対訳 2]

話の概要は前節で述べた通りである。まずはアルドゥス版のギリシア語原文をもとに、原文テキストの相違を確認しておく (下線は他の版と相違がある箇所)。

アルドゥス版ギリシア語

Ἀλώπηξ, καὶ λέων.

άλώπηξ μήπω θεασαμένη λέοντα, ἐπειδὴ κατὰ τινα τύχην αὐτῷ
 συνήντησε, τὸ μὲν πρῶτον οὕτως ἐφοβήθη, ὡς μικροῦ καὶ

ἀποθανεῖν. ἔπειτα τὸ δεύτερον θεασαμένη, ἐφοβήθη μὲν, οὐ μὴν ὡς τὸ πρότερον. ἐκ τρίτου δὲ τοῦτον θεασαμένη, οὕτως αὐτοῦ κατεθάρσεν, ὡς καὶ προσελθοῦσα διαλεχθῆναι.

Ἐπιμύθιον.

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι ἡ συνήθεια, καὶ τὰ φοβερὰ τῶν πραγμάτων εὐπρόσιτα ποιεῖ.

κατεθάρσεν はアックルシウスのギリシア語版では *κατεθάρσησεν* と表記。アルドゥス版は *κατεθάρσησεν* からひとつ目の σ が脱字したものと考えられる^{*29}。その箇所以外は、アルドゥス版はアックルシウスのギリシア語版と同じである。Ἐπιμύθιον. はアルドゥスおよびアックルシウス版のみ記載。なお、シャンブリー及びハウスラートの記載を参考にすると、ウァッラの原本の系統と関わりが想定される Class III 写本では^{*30}、ἀποθανεῖν が μὴ ἀποθανεῖν、οὐ μὴν ὡς が οὐ μὴ ὡς と記される。アックルシウスのラテン語対訳版のギリシア語本文では、τοῦτον が αὐτον。また、標題 *Περὶ ἀλώπεκος καὶ λέοντος*。したがって、アックルシウス当人のギリシア語版と字句が異なる。Class II に関しては、前節ハウスラート版テキストを参照。

以下、それぞれのラテン語訳を確認する。

アルドゥス版：Vulpes, & Leo.

Vulpes cum nunquam uidisset Leonem, cum ei casu quodam occurrisset, primum sic timuit, ut fere moreretur. Deinde cum secundo uidisset, timuit certe, non tamen ut prius, Tertio autem cum ipsum uidisset, sic contra eum ausa est, ut & accederet, & colloqueretur.

^{*29} あるいは、*κατεθάρρησεν* から ρ がひとつ脱字。いずれにせよアルドゥス版の誤りと思われる。

^{*30} 本論註 17 参照。

Affabulatio.

Fabula significat conuersatione terribilia quoque accessu facilia fieri.

アルドゥス版は、語順も含めて、概ね逐語的な翻訳といえる。sic と ut の関係もギリシア語原文に対応する。ただし、ギリシア語原文で θεασαμένη (分詞) が用いられている箇所は、いずれも cum + uidisset の cum 節で表現されており、ギリシア語の構文そのままではない。προσελθοῦσα についても、ラテン語では分詞を用いていない。また、最後の教訓部において、ὄτι 節が不定詞句に置き換えられ、意味上の主語にも変更が見られる。したがって、逐語的傾向を示しつつも、ギリシア語原文と構文まで完全に一致を図っているわけでもない。

ウァッラ版：De vulpe et leone

Vulpis nullum antea leonem conspicata quum illi aliquando ex improuiso obuissset : ita conspectum eius expauit : ut parum affuerit quin extingueretur : quod quum iterum postea accidisset ad aspectum quidem leonis exterrita est sed non ut prius. Tertio autem quum leonem eundem esset intuita non modo non exterrita sed etiam fidenter secum collocuta est et confabulata. Hec fabula innuit quod consuetudo et conuersatio faciunt ut que maxime horribilia et formidanda sunt neque horrida neque formidolosa videantur.

ウァッラ版は一見して長さが目立つ。話の基本的な筋書きはギリシア語原文に従うが、たとえば、ita conspectum eius expauit: ut parum assuerit quin extingueretur や non modo non exterrita sed etiam fidenter secum collocuta est et confabulata などは、ギリシア語に沿って翻訳したものというより、ウァッラによる話の解釈がラテン語表現に反映しているものと考えられる。また、collocuta ... et confabulata といったギリシ

ア語一語にラテン語二語を対応させる迂言的な修辭表現が用いられていることも特徴的である。θεασαμένη が用いられる箇所、conspicata の他、アルドゥス版同様に cum 節 + 接続法過去完了が用いられている。

リヌッキウス版：De vulpe et leone

Vulpes quae nunquam uiderat leonem : cum illi forte obuissset: eo pertimuit : ut mortem pene obiret. Rursum illum cum aspexisset pertimuit : sed minime ut primum. eum tertio cum intuetur prope accedens fuit ausa coram disserere. Fabula significat quod rerum terribilia usus et consuetudo domestica facit.

リヌッキウス版も比較的ギリシア語原文に沿ったものと思われる。ただし、3つの θεασαμένη (Class II では、2つめは περιτυχούσα) に関しては、1つめは qua + uiderat の関係節、2つめは cum + aspexisset の cum 節、3つめは cum + intuetur の cum 節であり、表現や時制の扱いに相違があるものの、アルドゥス版同様に分詞が用いられない*31。また、ut に対応する sic や ita がみられない。

教訓部は、原典の相違が翻訳に影響しているものと考えられる。Class II の教訓部は ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι καὶ τὰ φοβερὰ τῶν πραγμάτων ἢ συνήθεια καταπραῦνει であるが、domestica facit というラテン語訳は、アルドゥス版 (Class III) の示す εὐπρόσιτα ποιεῖ よりも καταπραῦνει に対応する*32。ラテン語の語順も Class II のギリシア語原文とほぼ同じである。一方、usus et consuetudo という迂言的な表現は、ウァッラ同様の特徴といえる。なお、リヌッキウス版およびウァッラ版ではギリシア語の ὅτι 節に対応して quod 節が導入される形となるが、知覚・伝達動詞の類が

*31 おそらく3つめの intuetur は誤りであり、ウァッラ版にみられる接続法過去完了 intuita esset が正しい形であろう。

*32 この箇所について、前節で参照したハウスラートは Class III においても καταπραῦνει とし、シャンブリーは εὐπρόσιτα ποιεῖ とする。

quod 節を従えるのは中世以降に一般化する用法である*³³。その点では、リヌッキウスと同じく δηλοῖ を significat とするアルドゥスは不定詞句を用いている。

アックルシウス対訳版：De Vulpe & leone.

Vulpes nondum conspicata leonem postquam per aliquam fortunam ei obuiauit: quidem primum sic timuit. quod quasi & mortua est. deinde secundo intuita timuit quidem: non tamen ut prius. Tercio autem ipsum conspicata adeo ipsum contra ausa est: ut & accedens colloqueretur.

Fabula declarat: quod consuetudo & terribilia rerum accessibilia facit.

ギリシア語原文との対応関係では、アックルシウスの対訳版ラテン語訳がもっとも逐語的といえる。ギリシア語で分詞が用いられている箇所も、この翻訳ではすべて分詞が用いられている。一方、primum sic timuit quod quasi ... として、sic に quod を対応させる用法は、中世以降のものである。また、教訓部はとくにギリシア語・ラテン語の逐語的置き換えにもみえるが、declarat と quod 節の関係は、やはり中世以降に一般化する用法であり、こうした特徴は、15 世紀におけるラテン語の様態を反映しているものとも考えられる。

ところで、この対訳版ラテン語訳について、リヌッキウス版との関係を確認すると、両者がほぼ共通していないことが分かる。共通性という点ではむしろ、対訳版とアルドゥス版の関係が興味深い。話の後半部を中心に、両者でおよそ半数の字句が一致するためである。ほぼ同一のギリシア語原文に基づいていたとしても、このことは、アルドゥスがアックルシウスの対訳版を参照・利用していた可能性を示唆するように思わ

*³³ 中世のラテン語の語法については、国原 (2007) や Mantello&Rigg(1996) を参照。

れる。

3.2 μάντις [Fab. 170; Ald. 40; Valla 25; Rin. 67; Acc. 対訳 17]

占い師が広場に座って他者を占っていたとき、ある人物がその占い師の家に泥棒が入ったと告げる。すると占い師は驚いて家に向かって走り去り、それを見た人が、他人のことは予言するという人間が、自分のことは分からないのか、と皮肉を言う。

この話には動物が登場しないが、ギリシア語散文イソップ集では定番と呼びうる話となっている。アルドゥス版ギリシア語原文は次の通りである（下線は他の版と相違がある箇所）。

アルドゥス版ギリシア語

Μάντις.

μάντις ἐπ' ἀγορᾶς καθήμενος, διελέγετο. ἐπιστάντος δέ τινος αἴφνης καὶ ἀπαγγείλαντος, ὡς αἰ τῆς οἰκίας αὐτοῦ θυρίδες ἀναπεπταμέναί τε πᾶσαι εἶεν, καὶ πάντα τὰ ἔνδον ἀφηρημένα, ἀνεπήδησέ τε στενάξας, καὶ δρομαῖος ἦει. τρέχοντα δέ τις αὐτὸν θεασάμενος, ὃ οὗτος εἶπεν, ὁ τὰλλότρια πράγματα προειδέναι ἐπαγγελλόμενος, τὰ σαυτοῦ οὐ προεμαντεύου.

Ἐπιμύθιον.

ὁ μῦθος, πρὸς τοὺς τὸν μὲν ἑαυτῶν βίον φαύλως διοικούντας, τῶν δὲ μηδὲν αὐτοῖς προσηκόντων προνοεῖσθαι περιωμένους.

アルドゥス版テキストはアックルシウス版のギリシア語原文と同一である。Ἐπιμύθιον. はアルドゥスおよびアックルシウス版のみ記載。ウァッラの原本の系統と関わりが想定される Class III 写本では、αἴφνης καὶ の καὶ および ἀναπεπταμέναί τε πᾶσαι εἶεν の τε πᾶσαι が省かれ、また、本文の ἀνεπήδησέ τε στενάξας が ἀναστενάξεται、δρομαῖος

が δρομαίως, προεμαντεύου が προεμαντεύσω, 教訓部の διοικοῦντας が διοικοῦντες, πειρωμένους が πειρωμένων と記される。アックルシウスのラテン語対訳版ギリシア語本文では、αἴφνης καὶ の αἴφνης が省かれ、θυρίδες ἀναπεπταμένοι τε πᾶσαι εἶεν は θυρίδες πᾶσαι, ἀναπεπταμένοι τε εἶεν と記される。また、標題は Περὶ μάντεως。ここでも対訳版ギリシア語本文は、アックルシウス当人のギリシア語版本文と字句が異なる。

この話では、Class II のギリシア語原文は Class III のものよりも長い。ここではハウスラート版のテキストを挙げておく。

μάντις ἐπὶ τῆς ἀγορᾶς καθεζόμενος ἠγγυρολόγει. ἐλθόντος δέ τινος αἰφνίδιον πρὸς αὐτὸν καὶ ἀπαγγείλαντος, ὡς τῆς οἰκίας αὐτοῦ αἱ θύραι ἀναπεπτασμένοι εἰσὶ καὶ πάντα τὰ ἔνδον ἐκπεφορημένα, ἐκταραχθεὶς ἀνεπήδησε καὶ στενάξας ἀπήει δρομαίως τὸ γεγονός ὀψόμενος. τῶν δὲ ὑποτυχόντων τις θεασάμενος εἶπεν· “ὦ οὗτος, ὁ τὰ ἀλλότρια πράγματα προειδέναι ἐπαγγειλάμενος, τὰ σαυτοῦ οὐ προεμαντεύου;”

τούτῳ τῷ λόγῳ χρῆσαιτο ἂν τις πρὸς ἐκείνους τοὺς ἀνθρώπους, οἱ τὸν ἑαυτῶν βίον φαύλως διοικοῦντες τῶν μηδὲν προσηκόντων προνοῆσαι πειρῶνται.

それぞれのラテン語訳は以下の通りである。

アルドゥス版：Vates.

Vates in foro sedens disserebat, cum autem superuenisset quidam derepente, & nuntiasset, quod domus ipsius & fenestrae apertae omnes essent, & quae intus, ablata omnia, exiit suspirando, & currendo ibat. At cum quidem uidisset ipsum currentem, heus tu inquit, qui alienas res praescire profiteris, tuas ipsius non praeuaticinabare.

Affabulatio.

Fabula in eos, qui cum suam uitam praeue gubernant, quae nihil ad se attinent, praescire conantur.

アルドゥス版は、概ねギリシア語原文に沿って翻訳が行われている。主文における時制の扱いも、ギリシア語原文との対応がみられる。他方、この話においても、ギリシア語原文の分詞を用いた表現について、ラテン語では基本的に *cum* 節あるいは関係節に置き換えられる。また、*θεασάμενος* を *cum + uidisset* の *cum* 節とする点は、「狐とライオン」と共通である。ただし、現在分詞 *sedens* および *currentem* がみられるため、分詞表現を用いないというわけではない。なお、*nuntiasset* に *quod* 節+接続法が附されるが、「狐とライオン」では *significat* に不定詞句が用いられたことを考慮すると、あるいはここも不定詞句または *ut* 節が用いられるべき箇所であるようにも思われる。

ウァッラ版：De vaticinatore

Vaticinator quidam in foro sedens sermocionabatur sibi quidam presto fuit trepidansque denunciauit fores domus eius refractas esse omniaque direpta que in domo fuissent at quem nuncium vaticinator gemens properansque cursu se domum recipiebat : Quem currentem quidam intuens O tu inquit qui aliena negocia te diuinaturum promittis certe tu ipsius non deuinasti. Hec fabula ad eos expectat qui res suas non recte administrantes alienis quae nihil ad eos pertinent prouidere ac consulere conantur.

この話のウァッラ版は、訳文の分量が増大していた「狐とライオン」に比して、およそギリシア語に応じたラテン語訳といえる。また、*denunciauit fores domus eius refractas esse* の箇所では他訳にみられる *omnes* を欠いている点、*gemens properansque* の箇所ではアルドゥス版の

exiluit に該当する動詞を欠いている点は、ギリシア語原文に *πάσαι* および *ἀνεπήδησέ* を含まないことを反映しているように思われる。このことは、原本として想定される写本の系統との関わりを跡付けるものであるが、その一方で、上記 *fores ... refractas* は、Class III よりも Class II の *αἱ θύραι ἀναπεπτασμέναι* に近いものとも読め、原本について依然不明な点が多い。なお、教訓部の *providere ac consulere* という言い回しは、先にもみられた修辞技法である。

リヌッキウス版：De uate quodam.

Foro urbis medio quidam uates : cuiuis fortem aperiebat futuram :
 quamobrem magna hominum frequentia stipatus : dum uni et alteri
 suam aperit sortem : ei nuntiatur : res suas furtim domo esse ablatas
 : quo audito domum curriculo dum abit : quidam ei obuiam factus
 : ridicule ait. cum alios quid esset futurum monebas : qui tue sortis
 nescius fuisti? Fabula significat. quod homines nequam corrigunt
 alios : et sua crimina scire se negligunt.

リヌッキウス版は、話の大筋は別としても、内容の詳細は Class II あるいは Class III の原文に即して翻訳したものとは読めない。参考までに、ハウスラートおよびシャンブリー採録の他系統のギリシア語版を確認しても、やはり対応しているようにはみえない。

リヌッキウス版においては、教訓部は全体的に *Fabula significat quod* ... の形式に整えられており、ラテン語翻訳時の体裁の統一が優先されている。この話の教訓部で示される内容については、いずれの版とも異なるうえ、必ずしも本文の内容に適合しないため、リヌッキウスが教訓部の参照元を誤った可能性も考えられるが、本文の特異性まで考慮に入れると、リヌッキウスが未知の原典を使用したか、あるいはラテン語版と

して独自に話を再構成した可能性も想定する必要がある*³⁴。

アックルシウス対訳版：De Vate.

uates in foro sedens disputabat instante autem quodam & nunciante quod domus ipsius fenestrae omnes apertaeque sint: & omnia quae erant intus ablata: prosiliitque suspirans: & cursius ibat. currentem autem quidam ipsum conspicatus o tu inquit alienas res praescire promittens tuas non praeuaticinabaris? Fabula ad quidem suam uitam male gubernantes nihil autem ad ipsos pertinentia prouidere temptantes.

アックルシウスの対訳版ラテン語訳は、この話においてもギリシア語原文と高い逐語性を示す。原文との対応関係はアルドゥス版よりも細かく、対訳版では、たとえばギリシア語原文で独立的属格が用いられる箇所は、ラテン語の独立的奪格に移し替えられている。なお、*instante autem quodam* の箇所でアルドゥス版の *derepente* に該当する語がないのは、ギリシア語原文 αἴφνης の省略に対応し、あるいは *domus ipsius fenestrae omnes* も原文の語順に従うものと考えられる。

また、この話に関しても、リヌッキウス版との関係は読み取れない。一方、アルドゥス版とは、構文の相違のために語形の異なる語彙まで含めると、ほぼ7割の字句が共通する。偶然の一致というには高い割合であり、アルドゥスがアックルシウスの対訳版を参照・利用していたことを裏付ける一例とみて問題はないだろう。

*³⁴ なお、たとえば Class II の方が長い話について確認してみると、リヌッキウスの他の4つのラテン語版はおよそギリシア語原文をふまえたものと評価できる。また、この話について、中世のラテン語版などが存在するかどうか本論執筆の時点で確認できていないが、あるいはそこまで検討範囲を広げる必要があるかもしれない。

3.3 ποιμήν και θάλασσα [Fab. 223; Ald. 49; Valla 31; Rin. 91; Acc. 対訳 23]

放牧していた羊飼いが、穏やかな海をみて船で交易して稼ごうと企図した。そこで、羊を売ってナツメヤシの実を購入し、いざ出航したところ、嵐に遭遇して積み荷をすべて失いつつ逃げ帰ることとなった。その後、その羊飼いが穏やかな海に感心する人物を目にして、海が再びナツメヤシを欲しがっているだけだ、と語った。

最後の発言を一種の負け惜しみととるか否かで解釈が分かれそうな話であるが、ギリシア語原文での基本的解釈は、人は被った災難から学習するものだ、とする方向性となっている。アルドゥス版のギリシア語原文は次の通りである（下線は他の版と相違がある箇所）。

アルドゥス版ギリシア語

ποιμήν, και θάλασσα

ποιμήν ἐν παραθαλασσίῳ τόπῳ ποιμνιον νέμων, ἑωρακῶς
γαληνῶσαν τὴν θάλατταν, ἐπεθύμησε πλεῦσαι πρὸς ἐμπορίαν.
ἀπεμπολήσας οὖν τὰ πρόβατα, καὶ φοινίκων βαλάνους πριάμενος,
ἀνίχθη. χειμῶνος δὲ σφοδροῦ γενομένου, καὶ τῆς νεῶς
κινδυνευούσης βαπτίζεσθαι, πάντα τὸν φόρτον ἐκβαλὼν εἰς τὴν
θάλατταν, μόλις κενῇ τῇ νηὶ διεσώθη. μετὰ δ' ἡμέρας οὐκ ὀλίγας
παριόντος τινός, καὶ τῆς θαλάττης, ἔτυχε γὰρ αὕτη γαληνῶσα, τὴν
ἡρεμίαν θαυμάζοντος, ὑπολαβὼν οὗτος εἶπε. φοινίκων αὐθις ὡς
ἔοικεν ἐπιθυμεῖ, καὶ διὰ τοῦτο φαίνεται ἡσυχάζουσα.

Ἐπιμύθιον.

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι τὰ παθήματα τοῖς ἀνθρώποις, μαθήματα γίνονται.

アックルシウス版とのテキストの相違は、アックルシウス版では εἶπε
が εἶπεν と記される点。Ἐπιμύθιον. はアルドゥスおよびアックルシウス

版のみ記載。ウァッラの原本の系統と関わりが想定される Class III 写本では、*eis tήn θάλατταν* が *eis θάλατταν*、*κενή* が *σὺν κενῇ*、*εἶπε* が *εἶπεν* と記され、他方、*μετὰ δ' ἡμέρας οὐκ ὀλίγας παρίοντος τινὸς* および *ἔτυχε γὰρ αὕτη γαληνιώσα* は含まれない。また、教訓部にて *γίνονται* が *γίνεται* と単数形で記される。アックルシウスのラテン語対訳版ギリシア語本文では、*φοινίκων* の箇所では *Ἰν λῶστε, φοινίκων* と呼びかけが含まれる。さらに、*θάλατταν* が *θάλασσαν* となり表記に相違があるが、*θαλάττης* は同じであり一貫性はない。また、標題は *Περὶ ποιμένου καὶ θαλάσσης*。したがって、この話も対訳版ギリシア語本文とアックルシウス当人のギリシア語版本文は字句が異なる。

この話では、Class II のギリシア語原文は Class III のものよりも短い（ただし、ウァッラ版で想定される系統の原文とはほぼ同じ分量である）。ここではハウスラート版のテキストを挙げておく。

ποιμὴν ἐν θαλασσίῳ τόπῳ ποιμνία νέμων ἑωρακὼς τὴν
θάλασσαν γαληνιώσαν ἐπεθύμησε πλεῦσαι πρὸς ἐμπορίαν.
πωλήσας οὖν τὰ πρόβατα αὐτοῦ καὶ φοινίκας ἀγοράσας ναῦν
ἐμποροσιάμενος ἀνήχθη· χειμῶνος δὲ σφοδροῦ γεγονότος καὶ τῆς
νηὸς περιτραπίσης ἅπαντα ἀπολέσας αὐτὸς μόλις ἐσώθη. μετ'
οὐ πολλὰς οὖν ἡμέρας τῆς θαλάσσης γαληνιώσης ἐθεάσατό τινα
παρίοντα καὶ τῆς θαλάσσης τὴν ἡρεμίαν ἐπαινοῦντα. ὑπολαβὼν δὲ
ἔφη αὐτῷ· “ὦ οὗτος, αὕτη γὰρ σοὶ φοινίκων ἐπιθυμεῖ.”

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι μαθήματα τοῖς φρονίμοις τὰ παθήματα γίνονται.

それぞれのラテン語訳を確認する。

アルドゥス版：Pastor, & Mare.

Pastor in maritimo loco armentum pascens uiso tranquillo mari,
desyderauit nauigare ad mercaturam, uenditis igitur ouibus, &

palmarum fructibus emptis, soluit. Tempestate uero uehementi facta, & nauis in periculo ut submergeretur, omni onere eiecto in mare, uix uacua nauis euasit inculumis. post uero dies non paucos transeunte quodam, & maris (erat enim id forte tranquillum) quietem admirante, suscepto sermone, hic ait, cariotas iterum ut uidetur desyderat, & propterea uidetur quietum.

Affabulatio.

Fabula significat calamitates hominibus documento esse.

この話に関しても、アルドゥスのラテン語訳の内容はほぼギリシア語原文に従ったものである。動詞と時制の対応も十分に意識されているように見える。本文半ばの *inculumis* は *incolumis* の、本文後半の *tranquillum* は *tranquillum* の誤植であろう*³⁵。一方、これまでにない特徴として、独立的奪格の多用があげられる。ギリシア語原文で独立的属格が用いられている箇所がラテン語の独立的奪格で表現されているばかりか、分詞構文が用いられている箇所がほぼ独立的奪格に置き換えられる。ここまで検討した話では、独立的奪格自体が使用されていなかったが、この話では一転してほぼすべての副文的表現が独立的奪格で記述されるのである*³⁶。また、*significat* の内容が不定詞句で表現されるのは「狐とライオン」の例と同様である。

この話に関しても、アルドゥスはギリシア語原文とラテン語訳を構文まで同一にすることまでは企図していないといえる。なお、*cariotas* は *caryotas* で、ギリシア語 *καρυοῦτις*、すなわちナツメヤシのことである。

*³⁵ たとえば 1518 年にフロベニウスが刊行したラテン語イソップ集 (=アルドゥスのラテン語翻訳部分を印刷したもの) では、それぞれ *incolumis* および *tranquillum* に修正されている。

*³⁶ 本論の検討範囲では、アルドゥスの独立的奪格使用の実態が詳らかではない。アルドゥスのラテン語翻訳における独立的奪格の使用については、今後さらなる追究が必要である。

ギリシア語原文の *φοινίκων* に対応するが、アルドゥスはこの話の前半で *φοινίκων βάλανους* を *palmarum fructibus* としており、訳語の統一を図っているわけでもなさそうである。

ウァッラ版：De pastore et mari

Pastor in loco maritimo gregem pascebat : qui cum videret mare tranquillum : inessit sibi cupido nauigatioeum faciendi ad mercatum : itaque uenundatis ouibus coemptis palmarum sarcinis nauigabat. Oborta autem vehemente tempestate et nauai mergi periclitante omne pondus nauis in mari deiccit : vixque euasit exonerata nauai : paucis post diebus veniente quodam et tranquillitatem maris admirante erat enim sane tranquillum respondens inquit : palmas iterum vult quantum intelligo. Ideoque innocuum sese ostendit. Hec fabula innuit eruditiores effici homines damno atque periculo.

ウァッラ版は、この話も基本的にギリシア語原文の内容に即して翻訳しているように見える。ただ、もっとも近いと想定される写本では、*paucis post diebus veniente quodam* および *erat enim sane tranquillum* に該当する部分が省略されており、当該写本だけではこの訳文にはならない。一方、*Ideoque innocuum sese ostendit* は Class III 写本に特有の文言を反映している。したがって、少なくともウァッラがいずれかの（あるいは複数の）Class III 写本を参照したことが想定される。

また、*paucis post diebus* の箇所は、Class III 写本一般では *μετὰ δ' ἡμέρας οὐκ ὀλίγας* であるから、本来はアルドゥスの *post uero non paucos dies* のように *non* が必要である。とはいえ、*non* の不在はウァッラのいずれの写本も同様らしく^{*37}、印刷時の脱落ではないと考えられる。意味的には Class II 原文の *μετ' οὐ πολλὰς οὖν ἡμέρας* に対応するようにもみ

^{*37} Galli(1978), p. 185.

えるが、ウァッラの訳の誤り、意図的な改変など、いくつもの可能性を想定できるため、依然不明な点は残る。

なお、教訓部について、*δηλοῖ* を *innuit* とする点は「狐とライオン」に同じである。とはいえ、「狐とライオン」では *quod* 節+直説法を用いたのに対して、ここでは不定詞句を用いている。また、*damno atque periculo* という言い回し (*παθήματα* 一語を二語で説明) は、「狐とライオン」「占い師」の話でも同様の修辞技法が用いられており、共通する特徴である。ただし、筆者が一通り確認した限りでは、ウァッラの残り 30 話に同様の表現はほぼ見られないため、全体的な特徴というわけではなさそうである。

リヌッキウス版：De pastore et Mari.

Pastor quidam iuxta littus maris : pecudes pascens : cum mare ipsum semel placidum aspiceret : nauigandi studio captus : oues pro dactulis commutauit. quibus naui impositis : cum altum iam nauigare : et orta tempestate sine spe salutis fluctuaret que in naui sunt : ea omnia proiecit : atque in portum uix se recepit. denuo cum oues pasceret : ac rursus mare tamen tranquillum uideret : suo consocio ipsam maris tranquillitatem commendanti ridicule ait : mare iterum dactulos cupit. Fabula significat. quod usus et peritia nos reddunt in periculis cautiore.

リヌッキウス版の前半はギリシア語原文の内容に従ったものといえる。ea omnia proiecit の箇所海に言及されない点、最後の発言が mare iterum dactulos cupit で終わる点などは、Class II の原文に対応する。また、in portum uix se recepit は、αὐτὸς μόλις ἐσώθη を文脈に沿って解釈した表現であろう。一方、denuo cum oues pasceret、suo consocio および ridicule ait については、他の系統も含めて、ギリシア語原文に対応す

る箇所が見当たらない*38。さらに、教訓部も、対応するギリシア語原文のない独自のものとなっている。これらの点については、未知の参照元が存在するか、あるいはリヌッキウスが独自に話を再構成した可能性を想定する必要もある。なお、教訓部の *usus et peritia* という言い回しは、「狐とライオン」の話でも見られた表現であるが、全体的な特徴ではない点はウァッラの場合と同様である。

アックルシウス対訳版：De Pastore & Mari.

Pastor in maritimo loco armentum pascens uidens tranquillum mare desyderauit nauigare ad mercaturam. uendens igitur pecudes & palmarum glandes emens soluit. tempestate autem uachementi facta & naue periclitante submergi omne honus proiciens in mare uix uacua naui saluatus est. post autem dies non paucos praetereunte quodam & maris : contigit enim tranquillum : quietem admirante exscipiens hic dixit. o optime palmas rursus ut apparet : desyderat : & propter hoc apparet tranquillum. Fabula declarat. quod passiones hominibus disciplinae fiunt.

アックルシウスの対訳版ラテン語訳は、この話においてもギリシア語原文と逐語的である。ギリシア語原文で分詞の箇所はラテン語でも分詞を用い、独立的属格の箇所は独立的奪格で表現される。また、o optime は ὦ λῆστε に対応し、やはり原文に忠実である。他方、ギリシア語原文で現在分詞や完了分詞、アオリスト分詞などの区別があっても、むしろ

*38 *ridicule ait* に該当する箇所について、ウァッラ版では *ridens inquit* と読む写本が多いようである（本論では当時の印刷版に従って *respondens inquit* としている）。Galli(1978, p. 185) は *ridens* を採用。ただ、Class II および Class III のギリシア語原文では対応するギリシア語がいずれも ὑπολαβόν であるため、どちらかといえば *respondens* の方がギリシア語の語義に沿うように思われる。ウァッラ版がリヌッキウス版に先行するため、リヌッキウスはウァッラを参照可能であったといえるが、この箇所が実際どうであったかは不明である。

る逐語的翻訳であるために、能動的意味の分詞表現がラテン語では基本的に現在分詞となってしまっており、時制の区別が失われている。その点では、ギリシア語原文から構文を変更するアルドゥスの方針には、時制や時系列の様態に関する一定の配慮があったものと考えられる。

この話もまた、リヌッキウス版との関係は読み取れない。したがって、ここまで検討した3つの話いずれも、アックルシウスの対訳版とリヌッキウス版の関係は確認できないことになる。アックルシウスの対訳版とギリシア語原文との逐語的関係を考慮すると、この対訳版ラテン語訳は、アックルシウスがリヌッキウス版に手を加えたものではなく、ギリシア語原文に基づいて新たにアックルシウスが翻訳しなおしたものである可能性が高い。なお、アックルシウスは自身の手でもリヌッキウス集を印刷刊行しており、リヌッキウスのラテン語訳を知らなかったわけではないため、こうした独自の翻訳は意図的な選択であったと考えられる^{*39}。

一方、この話においても、アルドゥス版と共通する字句は6割を超える。この一致率を考慮すると、やはりアルドゥスがアックルシウスの対訳本を参照・利用していたと考えてよさそうである。なお、その場合、アックルシウスの対訳本が61話を含むのに対してアルドゥス本は149話含み、また、対訳本のうち1話はアルドゥス本に含まれないため^{*40}、アルドゥスが参照できたのは最大で60話である。

ところで、ギリシア語原文に相違があるとおり、アックルシウスの対訳本のギリシア語原本の系統は、アルドゥス本と異なるものであったと考えられる。15、6世紀の写本群に、ハウスラートが ΠΙΥ(Γ) と分類す

^{*39} 本論註4参照。本論第2節で触れた「学識ある者たちではなく、習熟していない者たちや子供たちのためにこの作業を引き受けた」というアックルシウスの巻末の言葉は、まさしく彼自身の手で翻訳を行ったことを意味していたことになる。

^{*40} 対訳版31話(Περί ὄνου, καὶ δοῦρα λείοντος.)に該当する話をアルドゥス本は含まない。

る 61 話を含むイソップ集が複数残り^{*41}、シャンブリーに確認できるその系統に属する写本 2 種 (Lc, Lg) では^{*42}、話順もほぼアックルシウスの対訳本と一致する。写本を直接確認できているわけではないが、シャンブリーが *apparatus criticus* に記載する字句の相違を勘案すると、アックルシウスの対訳本のギリシア語原本は写本 Lg により近いものではなかったかと推察できる。しかしながら、具体的に原本が何であったか、現時点で詳細は不明である。

4. アルドゥスにおける「翻訳」の信頼性

以上、4 者のラテン語翻訳から 3 つの話と比較した。従来の書誌情報で指摘されるアックルシウスの対訳本とリヌッキウスの関係がおそらく誤りであること、さらにアックルシウスの対訳とアルドゥスの関係が見えてきた。本節では、これらの比較をふまえて、アルドゥスが求める「翻訳」の信頼性について考察する。

当初の推測通り、ギリシア語原本の相違がラテン語版の内容に影響を与えていることは確かであろう。4 者とも基本としたギリシア語原本の系統が異なるものであったことが想定されるが、それぞれのラテン語訳にはそれら系統の相違に由来すると思しき訳文の相違が見られるためである。しかし、とりわけウァツラとリヌッキウスのラテン語訳については、想定される原本の相違以上に両者の独自性が現れていることが多いように思われる。

仮に、ウァツラとリヌッキウスのラテン語表現の背後に何かしらのギリシア語が必ず対応しているとすると、両者には系統の異なる複数の参照元が存在し、それらを適宜利用しながらひとつのラテン語版に集約させた可能性を考えられる。この場合、たとえばウァツラ版「占い師」に

^{*41} Hausrath(1957), pp. XII-XIII.

^{*42} それぞれ Lc = Laur. Plut.59.33 および Lg = Ambros. F46 sup. (gr. 340)。

における Class III と Class II の要素の混在は、ウァツラが両方の系統を含む複数のギリシア語原文を参照し、そこから両方の要素を取り込んだものと説明できるだろう。しかし、複数の参照元から組み上げたものであれば、そのラテン語訳は、ギリシア語を翻訳したものとはいえるものの、訳出されたラテン語版そのものに該当するひとつのギリシア語原典が存在するわけではない。すなわち、そのラテン語版は、既存の複数のギリシア語版をもとに再構成された、訳者の独自版の色合いが強くなる。

実際には、*usus et peritia* といった言い回しや、ギリシア語原文の内容解釈を反映した結果ラテン語版独自の内容になったと推測できる箇所も見受けられ、これらに由来するラテン語版の独自性は参照元の問題だけでも言い難い。また、リヌッキウスの「古い師」や「牧人と海」（後半部分）に見られたように、対応するギリシア語版が不明な箇所も存在する。これらについては、その箇所に対応する参照元があったのか、あるいは訳者独自の創作であったのか、あるいは両者が混在するのか、現状では見分けが困難である。

こうした特徴もふまえて考えると、ウァツラとリヌッキウスのラテン語翻訳については、両者が個々の話を翻訳する際に、ひとつのギリシア語原典に依拠するばかりではなく、場合によって複数の原典を参照し、あるいは独自の要素を含めつつ、それぞれの裁量の下で表現に手を加えていたと想定すると分かりやすい*43。

しかしながら、両者のイソップ集全体の枠組みについては、話の配置順などが概ね一致する写本が存在することも確かである。したがって、たとえ複数の参照元があったとしても、両者がそれらから話を寄せ集めて、まったく新しい構成のイソップ集を編纂したわけでもない。つま

*43 たとえば、1430 年頃のコッラリウスのイソップ集は、おもにギリシア語版の話を中心に、独自の話としてラテン語で改作したものであった（本論註 25 参照。作例は Finch(1972); Berrigan(1975) に詳しい）。その点では、同時代のウァツラやリヌッキウスがコッラリウス同様に独自にギリシア語版に手を加える発想を持っていたとしても不思議ではない。

り、ラテン語翻訳イソップ集編纂にあたって、全体構成の基本となるイソップ集はある程度定まっていたことを推測できる。

一方、アックルシウスとアルドゥスのラテン語翻訳は、前二者とは性質が異なる。ラテン語翻訳がギリシア語原文と比較可能な形で提示されており、前節で検討したとおり、個々の話の翻訳がそのギリシア語原文に即して行われたことを確認できるためである。また、両者にとって、ラテン語翻訳はいわば学習者向けのものであり、副次的なものであった。このとき、ギリシア語原文が主役であり、両者のラテン語翻訳は、提示するギリシア語原文の内容を適切に表現することが目標となっていたと考えられる。すなわち、ギリシア語原文とラテン語翻訳の関係に関して、アックルシウスとアルドゥスは、ウァッラおよびリヌッキウスとは基本的な姿勢が異なっていたことになる。アルドゥスは既存のラテン語翻訳を「信用ならない」と評価したが、翻訳姿勢の相違に目を向ければ、(アルドゥス本人の認識は別として)ウァッラとリヌッキウスの「翻訳」はアルドゥスの「翻訳」とはそもそも別種のものであったといえそうである。

アルドゥスが求める翻訳の信頼性を考えるにあたっては、同じ方向性の「翻訳」であるはずのアックルシウスの対訳に対してアルドゥスが示す態度が重要であろう。語彙の共通性をふまえると、アルドゥスがアックルシウスの対訳を自身の翻訳の下地としていた可能性が高い。しかし、アルドゥスは要所要所で訳文を書き換えており、決してアックルシウスの対訳に満足していなかったことも確かである。そうであれば、その書き換え方に、「翻訳」に関するアルドゥスの意識が現れているのではないか。

アックルシウスの対訳は、ギリシア語原文に対してアルドゥスよりも明らかに逐語的であるが、アックルシウスの序文に見られるとおり、これはおそらく意図的なものである。しかし、その逐語性ゆえに、とくに分詞構文を中心として、ギリシア語の意味内容をラテン語としては表現

しきれていない面が生じている。たとえばギリシア語分詞の態・時制はラテン語と一致するわけではないため、本来は単純なラテン語への置き換えは難しい。アルドゥスが基本的には語順等の対応関係を保持しつつ、しばしば構文を転換してラテン語翻訳を行っていることは、ギリシア語原文の意味内容をラテン語として適切に表現しようとする意識の表れであろう。すなわち、元となるギリシア語原文に対して、アックルシウスが語彙レベルでの対応関係を重視したのに対し、アルドゥスは意味レベルでの適切な対応関係まで「翻訳」に求めており、それが時として語彙レベルの対応関係より重視されたのである。言うなれば、アックルシウスのラテン語翻訳がおよそギリシア語原文のラテン語への置き換えであったのに対し、アルドゥスはラテン語単独でも鑑賞に堪えうる翻訳を目指したことになる。

また、「適切さ」という点では、アルドゥスのラテン語翻訳にみられる特徴として、「古典」への意識が挙げられる。そのような意図を明記してはいないものの、翻訳そのものから判断できる限り、他の翻訳者に比して、アルドゥスは「古典」ラテン語を志向した翻訳を行っているためである。したがって、この場合、アルドゥスが求めた適切なラテン語表現は、「古典」ラテン語に準ずるものであったと考えられ、その点でもアックルシウスの対訳は不十分なものであったといえる。

ただし、古典志向のラテン語という点に関しては、もともとウァッラが先んじている。本論で比較した翻訳を例にとると、主動詞の時制の扱い、節や不定詞句の利用などの点で、ウァッラとアルドゥスに共通する部分も見いだせる。アルドゥスがイソップ集翻訳以前にウァッラの *Elegantiae linguae Latinae* を目にし、その文体論にも触れていたこともふまえると^{*44}、翻訳自体の参照関係はともかくも、アルドゥスのラテン

^{*44} 1502 年にアルドゥスが刊行したスタティウス作品集に含まれるマルクス・ムスルス宛献辞 (Aldus Romanus Marco Musuro Cretensi s. d.) で、ウァッラの *Elegantiae* に言及されている (Grant(2017), pp. 36-39 参照)。記述に従えば、アルドゥスは若い頃ローマで

語表現の方向性については、先人たるウァッラの精神を受け継ぐものでもあったといえそうである。とくに 16 世紀以降、ラテン語の古典回帰的傾向が強まることになるが^{*45}、アルドゥスが示したラテン語翻訳はその先駆けということにもなるだろう^{*46}。

さて、以上の考察から、アルドゥスのイソップ集におけるラテン語「翻訳」の在り方が明らかとなってきたように思われる。すなわち、(1) ギリシア語原典とのできるだけ過不足のない対応関係、(2) 「古典」に準じた適切なラテン語であること、の 2 点が重要であり、両者の両立が「信頼できる翻訳」の条件となる。アルドゥスは少なくともこの 2 点を満たすよう「心を砕いた」のである。この条件に照らしてみると、アックルシウスの対訳版は (1) を高い水準で満たすものの、(2) が十分には満たされない。ウァッラの場合は、(2) は一定程度満たすが、(1) は判然としない。リヌッキウスについては、(1) も (2) も不十分なものといえる。つまり、アルドゥス基準では、これらの点において、既存

ラテン語を学んでいる時期 (1470 年代前半) に、ウァッラの *Elegantiae* を目にしたものと推測できる。ウァッラの *Elegantiae* は 1440 年代の著作で 1471 年の初版以来各地で盛んに印刷されるが、たとえば 1471 年にローマで刊行されており (ISTC: iv00050000)、状況的にはアルドゥスも印刷本で参照可能な状態だった。

^{*45} Carso&Laird(2009), Leonhardt(2013), Knight&Tilg(2015) など参照。こうした傾向においては、*Elegantiae* (前註) によるウァッラの影響も大きい。したがって、(アルドゥスに限った話ではないものの、) アルドゥスのラテン語に本論で述べるようなウァッラの影響があるとすれば、イソップ集翻訳にとどまるものではないと考えられる。また、この時代、「古典」としてキケロのラテン語を至上とする立場も見られるが、アルドゥスがイソップ集翻訳で示すラテン語はそこまで原理主義的ではないようにみえる。なお、アルドゥス以前の、14 世紀以降のヨーロッパにおけるギリシア語学習やラテン語翻訳の展開に関しては、たとえば Sandy(2014) や Hosington(2014) など。

^{*46} アルドゥスは、エウリビデス『ヘカペー』『アウリスのイビゲネイア』のエラスムスによるラテン語翻訳版を 1507 年に刊行した。その冒頭の学習者向け序文をアルドゥスが記しており (Aldus studiosis s.)、エラスムスの翻訳を「*admodum quam fideliter et erudite*」と評している (Wilson(2016), pp. 300-301 参照)。アルドゥスが示す既存のラテン語翻訳イソップ集に対する評価と逆であり、この時期のギリシア語・ラテン語を取り巻く状況の変化が垣間見える。アルドゥス周辺のエラスムスは Geanakoplos(1960) などに詳しいが、イソップ集刊行時点ではアルドゥスとエラスムスに直接的な関わりはないようである。

の「翻訳」は「信頼できない」ものと評価されうるものであった。

とはいえ、先に述べたとおり、アルドゥスがアックルシウスの対訳を下地としていた可能性は高く、「信頼できない」にしても、アルドゥスがそこに一定の評価を与えていたことも明らかである。その点では、まず(1)を満たすことがアルドゥスの「翻訳」において必須であったといえる。そのうえで、アックルシウスの対訳という、(アルドゥスにとって)不完全な先例の存在が、むしろアルドゥスをして対訳形式のラテン語翻訳に着手させる一因となった可能性も考えられる。アルドゥス版は、(1)(2)をともに満たすべく、アックルシウスの対訳を内容や体裁の面で大幅に改訂するものとも見ることができるためである*47。

5. おわりに

本論では、アルドゥスが示したイソップ集の既存の「翻訳」に対する評価をもとに、アルドゥス版を含む4つのラテン語翻訳イソップ集を対象として比較検討を行った。その結果、4つの「翻訳」がそれぞれ在り方の異なるものであることが明らかとなった。

現代の私たち(とりわけ古典学徒)の目から見ると、アルドゥスが示す翻訳姿勢はきわめて穏当であるように思われる。しかし、15世紀末の時点のラテン語翻訳イソップ集は、ウァッラヤリヌッキウスのような、いわば「混合型」とでも呼ぶべき「信頼できない」翻訳が主流であったことに注意すべきである。私たちがこれらの「翻訳」イソップ集を扱う場合、ともすればひとつの話に複数の参照元が想定されうることも念頭におきつつ、個々の話に接する必要があるだろう*48。

*47 アックルシウスの対訳版とアルドゥス版の関係が推測通りであれば、アルドゥスは対訳版と合冊のリヌッキウス版を目にしていたはずである。とすれば、なおのこと既存の翻訳が信用ならないものとみえたのではないかと思われる。

*48 たとえば、アプトニオスに帰されるギリシア語イソップ集では、既存の複数の異なる話の要素が混ざった話の作例がみられる(Dijk(2011), pp. 198-9. “contamination”と呼ぶ

ところで、1515年刊行のマルティヌス・ドルピウス *Martinus Dorpius* 編纂のラテン語散文イソップ集序文で、編者のドルピウスが、当時イソップ集編者としてアルドゥスの名がよく知られていたことに触れつつ、「きわめて洗練された（ラテン語）散文によるイソップ集を再び世に出す (*fabellas Esopicas rursus emittere . . . prosa oratione nimisque lepide concinnatas*)」企図を記している^{*49}。ドルピウスの記述は、アルドゥス集の存在が新たなラテン語散文イソップ集編纂のひとつの動機となったことを示唆するものであり、アルドゥス集が同時代的に高く評価されていたことを教えてくれる。

他方、ドルピウス編纂のイソップ集が、ギリシア語からの翻訳を誇るものではなく、「ラテン語散文」に焦点をあてるものである点も興味深い。アルドゥスのラテン語翻訳に対する評価が、「翻訳」の信頼性よりも、結果として優れた「ラテン語散文イソップ集」として読みえたことに基づくものだったと考えられるためである。実際、1510年代にはアルドゥスのイソップ集のラテン語散文部分のみをまとめた印刷本も確認できる。もともとのアルドゥスの意識からの乖離がみられるが、むしろこの点に当時のイソップ集の在り方の一端が垣間見えているようにも思われる^{*50}。

れる)。一方、ここでいう「混合型」では、一つの話について系統違いの要素が混在することになる。

^{*49} ドルピウス集については、*Thoen(1970)* や *Carnes(1986)*、*González(1998)* を参照。ドルピウス集は、複数の著作家によるイソップ集をまとめたもの。編者のドルピウス(1485-1525)はルーヴェン大学で活動した人文主義者、神学者でラテン語教師である。ここでは、筆者が確認できた1515年のストラスブール刊行版を挙げた(電子画像版が複数公開されている)。*Thoen(1970, pp. 249-251)* によれば、おそらくこれは、1513年のルーヴェン刊行版(新版初版:旧版は1512年アントワープ刊行)を基礎として1514年にストラスブールで刊行されたものの再刊本である。また、*Thoen(1970, pp. 247-281)* の調査リストでは、ドルピウス集は、16世紀を中心として(155種挙げられている)、19世紀半ばまでにおよそ200種の刊本を数える。

^{*50} 15世紀末以降、イソップ集はラテン語のみならず各国語で幅広く印刷刊行され、それらが読み物として広く普及したわけであるが、逆に、その状況下での「古典ギリシア語」

* * * * *

本論はラテン語翻訳イソップ集を対象としたが、近世ヨーロッパにおけるイソップ集に広く目を向ければ、各国語への展開も著しく、また、創作系イソップ集も多数登場している。本論で扱った対象が、そうした拡がりの中でもほんの一部にすぎないことは確かであるが、本論において確認した各種「翻訳」の在り方は、ギリシア語からラテン語に限らず、種々の「翻訳」を検討する際にも参考になるのではないと思われる。多くの時代、地域で翻訳イソップ集は普及していたのであり、現代までの「翻訳」を謳うイソップ集を本論で考察した視点から捉え直すことは、古代以来のイソップ集の普及と展開を解き明かすうえで、ひとつの足掛かりとなりそうである。とはいえ、本論の範囲だけでは全体を語るのは難しく、こうした議論の有効性も含めて、今後のさらなる検討が必要であろう。

参考文献

- Adrados, F. R. (2000) *History of the Graeco-Latin Fable, vol. 2: The Fable during the Roman Empire and in the Middle Ages*, Leiden. (tr. by Leslie, A. R.)
- Berrigan, J. R. (1975) "The Libellus Fabellarum of Gregorio Correr", *Manuscripta*, Vol. XIX, pp. 131-138.
- (1980) "The Aesopic Fables of Ognibene da Lonigo", *The Classical Bulletin*, Vol. 56, pp. 85-87.
- (1982) "The Latin Aesop of the Early Quattrocento: The Metrical Apologues of Leonardo Dati", *Manuscripta*, Vol. XXVI, pp. 15-23.
- Carnes, P. (1986) "Heinrich Steinhöwel and the Sixteenth-Century Fable Tradition", *Humanistica Lovaniensia*, Vol. XXXV, pp. 1-29.
- Caruso, C. & Laird, A., eds. (2009) *Italy and the Classical Tradition*, London.
- Chambry, É. (1925-6) *Aesopi Fabulae*, I-II, Paris.
- Crusius, O. (1897) *Babrii Fabulae Aesopeae*, Leipzig.

- Dijk, G.-J. van (1996) “The (Pseudo-)Ignatius Tetrastichs: Byzantine Fables ‘D’une élégance laconique’”, *Reinardus*, Vol. 9, pp. 161-178.
- (2011) “The rhetorical fable collection of Aphthonius and the relation between theory and practice”, *Reinardus*, Vol. 23, pp. 186-204.
- Finch, C. E. (1960) “The Greek Source of Lorenzo Valla’s Translation of Aesop’s Fables”, *Classical Philology*, Vol. LV, pp. 118-120.
- (1972) “The Renaissance Adaptation of Aesop’s Fables by Gregorius Corriarius”, *The Classical Bulletin*, Vol. 49, pp. 44-48.
- Ford, P., Bloemendal J. & Fantazzi, C., eds. (2014) *Brill’s Encyclopaedia of the Neo-Latin World*, Leiden.
- Garri, R. (1978) *The First Humanistic Translations of Aesop*, Urbana, Illinois. (dissertation)
- Geanakoplos, D. J. (1960) “Erasmus and the Aldine Academy of Venice: A Neglected Chapter in the Transmission of Graeco-Byzantine Learning to the West”, *Greek, Roman and Byzantine Studies*, Vol. 3, pp. 107-134.
- González, E. G. (1998) “Martinus Dorpius and Hadrianus Barlandus Editors of Aesop (1509-1513)”, *Humanistica Lovaniensia*, Vol. XLVII, pp. 28-41.
- Grant, J. N. (2017) *Aldus Manutius: Humanism and the Latin classics*, Cambridge, Mass.
- Hausrath, A. (1957-59) *Corpus fabularum Aesopiarum*, vol.1, fasc. 1-2, Leipzig.
- Hosington, B. M. (2014) “Translation and Neo-Latin” in Ford, P., Bloemendal, J. & Fantazzi, C. eds. (2014), *Macropaedia*, Ch. 11, pp. 127-139.
- Knight, S. & Tilg, S., eds. (2015) *The Oxford handbook of Neo-Latin*, Oxford.
- Leonhardt, J. (2013) *Latin: Story of a World Language*, Cambridge, Mass. (tr. by Kronenberg, K.)
- Lockwood, D. P. (1913) “De Rinucio Aretino Graecarum Litterarum Interprete”, *Harvard Studies in Classical Philology*, Vol. 24, pp. 51-109.
- Marsh, D. (2003) “Aesop and the humanist apologue”, *Renaissance Studies*, Vol. 17, pp. 9-26.
- Montello, F. A. C. & Rigg, A. G., eds. (1996) *Medieval Latin: An Introduction and Bibliographical Guide*, Washington, D.C.
- Österley, H. (1873) *Steinhöwels Äsop*, Tübingen.
- Perry, B. E. (1934) “The Greek Source of Rinuccio’s Aesop”, *Classical Philology*, Vol. XXIX, pp. 53-62.

- (1952) *Aesopica: A series of texts relating to Aesop or ascribed to him or closely connected with literary tradition that bears his name: collected and critically edited, in part translated from oriental languages, with a commentary and historical essay: vol. I Greek and Latin Texts*, Urbana.
- Sandy, G. (2014) “Hellenism” in Ford, P., Bloemendal, J. & Fantazzi, C. eds. (2014), *Macropaedia*, Ch. 10, pp. 113-125.
- Thoen, P. (1970) “Aesopus Dorpii: Essai sur l’Esopé latin des temps modernes”, *Humanistica Lovaniensia*, Vol. XIX, pp. 241-316.
- Wilson, N. G. (2016) *Aldus Manutius: The Greek Classics*, Cambridge, Mass.
- 伊藤博明 (2009) 「ポッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』——シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」のスペイン語版について」, 埼玉大学紀要 (教養学部), 第 45 号第 2 号, 1-15 頁.
- (2010) 「「猫の首に鈴をつける」(1)——アステーミオ『百話集』をめぐって」, 埼玉大学紀要 (教養学部), 第 46 卷第 1 号, 31-60 頁.
- 小堀桂一郎 (2001) 『イソップ寓話その伝承と変容』, 講談社学術文庫 1495, 講談社.
- 國原吉之助 (2007) 『新版 中世ラテン語入門』, 大学書林.